

# 至誠

明治神宮武道場  
至誠館 館長

荒谷 卓



## 「時」の真理

「時」について考えてみたい。  
過去のものとは現在のものとは、二つ別々に存在するのではない。同じものの中から生まれ成ったもので、過去は今に成り、未来は今から生まれる。時の外に立って、動画のコマ送りのように分断して観れば、別々のもののように見えるが、私達は時の中にいるのだから、本来あるがままに時の内から見ると一つである。

も、現在の20歳になる彼の成長の経緯であり、全てが彼自身である。過去の彼が別に存在するわけではない。また、川の流れるも、今見ているのは1時間前には上流のどこかを流れていたのかもしれないし、同じところで滞留していたのかもしれない。いずれにしても、水の流れるは、過去と現在のように二つに分断することはできない。

現代の日本が別のものというわけではない。江戸時代と現代が全く違うとすれば、その間のどこかで、「時」が完全に終わって、どこかで、新しい「時」が始まったと考えるしかない。そのようなことは、言葉の比喩として使うことはできても、現実にはあり得ない。

人形のような物として蔑む思想だ。この考えで行けば、時は個人個人に属し、一人の人間が死ねば時はそれと共に終わるといことになる。

「時」の立場から見れば、身体の細胞が数日から一週間で死亡し、新しく生んだ細胞に役割を引き継いでいく新陳代謝と同様、父母と子、子と孫の絆は祖先が築いてきた壮大なる創造の繋がりであり、社会の、地球の、宇宙の新陳代謝と言えらる。つまり、一人の死で時は終わらないのである。

## 伝統精神の継承とは何か？

同じように、社会も、国も、世界も、過去と現代は、一連の「時」の流れ、あるいは全体としての成長そのものであって、「江戸時代の日本」とも、現在の20歳になる彼の成長の経緯であり、全てが彼自身である。過去と現代が全く違うとすれば、その間のどこかで、「時」が完全に終わって、どこかで、新しい「時」が始まったと考えるしかない。そのようなことは、言葉の比喩として使うことはできても、現実にはあり得ない。

過去、現在、未来の「時」が一体的であるという立場に立ち、過去がそのまま現在となり未来となることを知り、子供がそのまま大人になることを知れば、自然界のすべてのものが独立し対立しているのではなく、一体として成り立っているということを知ることが出来るだろう。「時」は、まさに宇宙の創造から現在そして未来にわたるすべてのものを結びつけていると言える。この「時」の真理を知るとは、対立や分断のような不自然な状態から自



近代西欧思想では、親と子は完全に独立した存在であるとされ、子供は親からの完全なる自立権を主張する。人間を工場で生産される

分断のような不自然な状態から自



然本来の一体性を取り戻し、一体的平和を得ることに繋がる。

このような「時」の考えの根源は、古事記冒頭の一説「天地初発之時（宇宙創造の時）」に基づいている。古事記の宇宙観では、「時」は高天原（宇宙）と共に成り、天之御中主神（宇宙の中心のビックバン）と共に成ったのである。「神」（宇宙を構成する非物質エネルギー）と「時」（宇宙を構成する物質）と「時」は一緒であるという見方である。

「神」、「宇宙」、「時」を別々のものと見ると、例えば、「神」や「宇宙」を「時」の支配の下に置き、神は何時から在るかとか、宇宙は何時できたかというように考え、分からなくなる。また、物質的宇宙だけを見て考えると無神論、唯物論に墮することになり、更に「神」が宇宙も時も創ったものとする、神を超越させて宇宙の外にある絶対創造主として崇める一神教に陥ってしまう。

「神」、「宇宙」、「時」を一体と見るということとは、すべてのものは、ビックバンではじまった非物質と物質と時の生成活動の一端であるということの意味する。つまり、自分自身が、「宇宙」の当事者であり、「時」

の当事者であり、「神」の当事者として、宇宙の中に生まれ、宇宙の中に行い、宇宙の中に死ぬということである。このように、宇宙の中で生き、行い、何かを成し遂げる自己を体現する思想が古事記の神道だ。

「時」は、過去と今と未来を一体となす。空間的つながりを時系列としても一体化する。つまり、宇宙創元以来の物質的・非物質的活動の総てが「時」として「一体化」し、「渾然たる統一体」としての宇宙をなしている」のである。そう考えれば、人間一人ひとりが生まれ成り、生命を授かった心身の働きは、宇宙創元以来続く全体の生成活動の一翼を担う大いなる意義を有することが分かるであろう。

神道には、連綿と続く「時」の考えがあり、それを「中今（なかいま）」と呼んでいる。宇宙の創元から未来へと無窮に続く時は、常に「今」に集約され顕現されるといふ考えだ。

初代神武天皇が、奈良の橿原に大和（日本）を建国するに際して、建国の詔を国民に示した。「天（宇宙）の下におおわれた一つの家のような社会を創るよう努力しよう

ではないか」と。宇宙創元の自然の法理に従い、天皇自らが「今の時」を大切に努力を継続し、国民もそれに習い、何かを為せば、人間の社会も宇宙が続く限り栄える（天壤無窮）と考えたのだ。

このような考え方は、自らが「時」中に生きる当事者として、主体的に行動し全体の成長発展に貢献するという積極的な生き方である。「今」を大事にするということは、過去の出来事に意義を持たせ、将来の基盤となる「今」に精一杯の努力を惜しまないということだろう。逆に言えば、「今」を無駄にするということは、個人のみならず人類のそして地球の歴史の営みと努力を無駄にし、子々孫々の未来を破壊することに繋がる。「今」この時に、人間一人ひとりが「世のため人のため」に力を尽くすことが、宇宙に生まれてきた重要な意義ではなからうか。

物質としての肉体の共有は適わないが、精神・心・霊の共有は可能であり、人類と自然の成長発展に貢献した人の精神は同じ時に生きる人々のみならず、時を違えて生きる人々の心までも感化し、共鳴させ一体化させることができる。そ

して、一人では到底できるはずもない大事業が、空間的広がりだけではなく時間的継承によって達成されるのである。

私たちが、「伝統精神の継承」と呼ぶところのものは、「一個人では達成できない大きな目標を、世代を超えた意志の継承という長期的な努力の積み重ねにより成し遂げよう」とするものである。それは、宇宙創元の理を悟り、先達の思い描いた理想や理念に賛同し、時代を越えてその遺志を引き継いでいくことで、時を貫く意志の柱を打ち立てることである。

それによって、一世代では不可能な理想社会の実現を、歴史的集団の事業として維持・発展させることを、日本人は価値あるものと見なしてきた。

この視点からは、個々の人間がその一生涯に自分のためにどれだけのことを成し遂げたのか、という利己的成果に惑わされて人生を無為にせず、社会に生きる人間として、同じ時代に生きる人々との絆や融和だけではなく、過去や将来、即ち祖先や子孫との心と意志の繋がりを、大事にし、時と空間をまたぐ無

窮の大事業にどのように貢献したかという歴史的役割こそ価値があるものと見なすことになる。歴史的作用とは、一人の行為が歴史を通じ多くの人々に貢献するということ、不朽の利他的使命を為し得たということである。

このような、積極的な生き方が「中今（なかいま）」であり、それを具体的に促すのが「天（宇宙）の下におおわれた一つの家のような社会を創るよう努力しようではないか」という神武建国の詔勅にある日本建国の思想である。国が、そして世界が、大自然が苦しみも楽しみも分かち合い、共に助け合い、共に成長を願う家族のように暮らす世を造り為さんとする、主体的かつ継続的、生成活動を目的とする人類思想なのである。

### 共同体としての「家」の再構築

西欧思想が世界を覆うようになった近代以降、我々人類は、人間の「存在」と「理性」を過信し、多くの過ちを犯してきた。そこでは「神」、「宇宙」、「時」と一体の人間の本来的自性を、自我意識の狭隘なる空間

に閉じ込め、人間を孤立した物質的「存在」として蔑んだ。「神」、「宇宙」、「時」と共に生きる壮大なる人間の「自由」を奪い、理論と法の奴隷状態に貶めてきた。「神」、「宇宙」、「時」から生成した公共の恵みを人間個人が所有できると勘違いし、社会と自然の本来あるべき成長発展を妨げてきたのである。

このような教訓を基に、我々は、本来の宇宙の一員として正しく生きるための社会を再構築しなくてはならない。人間は、その団体生活を離れて、個人主義に走り、自由主義に赴くことが邪悪の出発点である。団体生活の分裂解体が人生悪、社会悪の根源である。

具体的には、氏神様を中心とした伝統的村落や家族的に結ばれた共同体としての「家」を解体したことが、現在の孤独老人、年金・介護問題、就職難問題、いじめ、格差など現代的社会問題の根本起源である。したがって、我々は、あらためて共同体としての「家」を再構築することから始めなくてはならない。

人間は、社会の中で教え育まれ、体験し体得し体頭することで自然本来の自性を自覚し発頭できるよ





うになる。「行う」の体験、「知る」の体得、そして宇宙の一員に「成る」の体頭の三位一体の境地に辿り着けば、学問的眞実を語り得る。理論・推論の絶対性を疑い共助社会の中で、「体験、体得、体頭」するところの教育を重視するべきである。

に、第三者として客観的に宇宙の外から抽象して得た概念は、いかに理論的に整備されたとしても、生きた宇宙はそこからは出てこない。例えば、日本の武人になって武道の稽古を体験すれば、次には日本の武を体得して「知る」こととなる。体得して知ったことは、実際に行うことで体頭できるわけだ。これこそが眞の学びと成長であり、理論的に推論してみたところで日本の武の何たるかは「行う」ことはおろか「知る」こともできるはずがない。

グローバル化によって解体された伝統的「家」を、新たな共助体の「家」として再構築しなくてはならない。そこでは、共助の精神である「世のため人のため力を尽くす」と、「人様に迷惑をかけてはいけない」ことを基本的価値慣習とする。共助体の一員としての自覚が芽生えれば、自発的に一員と「成つて」共助体の仕事に加わる。共助体の一員として一所懸命働けば、仕事を「知り」、所を得ることになる。共助体の中で己の所を得たなら、社会のため

に為すべき仕事を一生懸命全うする。それが、人々の役に立ち幸福と成長に貢献すれば、おのずと他の人々から感謝され、生涯を全うした後もその生き方は崇敬の念を持って語り継がれ引き継がれ、共助体の守り神となつて永遠に祭られる。その人の精神は歴史伝統として、不朽の時と共に生き、何時の時代でも「今」その時々の人々と共に生き続ける。

このような共助体の形成を、身近な町内会や自治会あるいはNPO等からはじめ、夫々の共助体の特性を相互に尊重しつつネットワークを構成し、それが地方行政や国政に広がり、更には世界に広げる。人々が心を一つにして「天(宇宙)の下におおわれた一つの家のような社会を創るように努力しようではないか」という日本建国の思想を実践する共助体が新たな「家」となる。

ここに、眞の平和があり、ここに眞の幸福がある。人間が神と、時と、自然と一体と成つて宇宙創元の活動に参画し、皆が天上無窮の成長発展のなかに生きる世界が実現されるのだ。

